

令和4年度学校評価報告

甲府市立新紺屋小学校

学校教育目標

「かしこく 心豊かに たくましく生きる子どもの育成」

I. 「学校運営に関して」 (評価項目1~7)

*主に「あてはまる」が「ややあてはまる」より下回っている項目、昨年度と比べて「あてはまる」率が下がっているまたは全体として低い項目について課題として列挙した。

◆ 集計結果の考察

- ・1項「学校教育目標や経営方針(重点)の共通理解が図られている」については、昨年度同様であり、また、保護者アンケートの13項「学校の教育方針や活動内容について関心を持っている」率も同様であった。教職員が同じベクトルで教育活動を行っていく意識は人事異動の入替においても維持されたことは成果として挙げられる。肯定的な評価は昨年度同様であるが、肯定的な回答の中で「お子さんが学校は楽しい」の「ややあてはまる」率が増えている状況がある。児童全体を注視する中で、全ての児童が笑顔で安心して学校生活を送れるよう全職員で意識していく必要がある。
- ・全体的に良い評価結果であるが、肯定的な評価の中でも気になる項目として、
3項「校内支援体制が整えられ、個に応じた指導が効果的に推進されている」、
6項「職員は研修・研究に努め、校内研究は、職員の共通理解のもと効果的に行われている」については、肯定的な割合が昨年度と比べ若干低くなった。20名程度の集計では一人の判断が全体の結果に大きくつながることもあり、人事異動での教職員の入替による捉え方の違いによるところもあるが、「令和の日本型学校教育」の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の構築に向け、チームとして学校教育目標の実現に努める意識の向上につなげていく必要がある。
- 5項「校務について見通しを持つ中で効率化を図り、働き方改革を推進している」については、前月までの時間外時数をグラフにして掲示したり、月の学校職員全体の総時間外時数目標を設定したりすることで改善傾向にあるが、引き続き効率化を図ると共に、状況に応じて校務を整理していく必要がある。
- 7項「登下校の交通ルールや避難訓練など児童の危機意識を高める指導や安全指導を行っている」については、昨年度と比べて更に高評価であるが、保護者アンケートでは、昨年度よりも下回るといった結果であった。

◆ 学校関係者評価

- ・どの項目も高評価を受けており学校運営がうまくいっていると感じた。その中で他の項目と比べれば校務の効率化と災害時等の行動が気になる。すぐに成果が出にくい課題であるが、職員が一致団結して根気強く訓練や広報活動に力を注いでいく必要がある。
- ・小中体連研究推進校の指定を受け、公開研究授業を行うとあるが、特にどのような授業を主として行っていくのか。→ 投運動を中心とした授業公開を今年度実施した。次年度は、学年混合授業を検討中。
- ・通常の体制や活動(意識付)などは、児童の自発的な行動面でやや不安があり、防災訓練以外でも、不定期にホームルームなどで少し話題を振って意識付を行ってほしい。
- ・先生方が学校経営について、多忙な中で子供達のために頑張っておられる様子がよく分かった。アンケートに対する分析と方針も適切であると思う。
- ・校内研修体制についても、教員の方の記述を見ると、他のクラスの参観の機会が考慮され大変勉強になっているとの声に象徴されているように、多忙な現状を改善し、質の高い教育ができる環境を整えていくことに管理職の方々も努力されていることがよく分かる。先生方の記述を見ると、今ある業務をどう見直し、より良い実践のためにどうしていきたいかという考え・思いもあり、こうした声を職員で共有しながら、改善の方向性を探っていけると良いのではないかなと思う。
- ・児童アンケートの項目1の「学校が楽しい」ということについて、「あまりあてはまらない」「あてはまらない」子供がいるということについては、今後も注意しながら教育活動を進めていっていただければと思う。

◆ 課題の改善策

- ・3項「校内支援体制が整えられ、個に応じた指導が効果的に推進されている」、
- 6項「職員は研修・研究に努め、校内研究は、職員の共通理解のもと効果的に行われている」
→ 個に応じた指導は、「令和の日本型学校教育」の柱の一つである「個別最適な学び」につながるものであり、その実現に向け、今年度の取組である学習指導員や山梨大学院生、教育ボランティア等との連携について引き続き行い、明確な関わり方や効果を考え、可能な限り、授業での様子を聞き、改善策を講じて次の活動に生かしていくようにする。また、校内研究との関わりで、ICTの活用スキルを高め、指導力向上に努める。今年度から2年間、小中体連研究推進校の指定を受けており、次年度はまとめとして公開研究授業を行うことから、チーム学校の実現に向けて、職員間の連携を強化し、学び続ける教員の素地を組織的に確立する。
- ・5項「校務について見通しを持つ中で効率化を図り、働き方改革を推進している」
→ 時間外時数のグラフを掲示したり、全職員の時間外総時数の目標設定をしたりすることで、職員の勤務時間に対する意識付けを継続して行っていく。内容の精選や変更、業務の効率化を図ることを、定期的に声掛けを行い意識化していくとともに、校務を整理し副担当制をより意識した組織体制を確立していく。
- ・7項「登下校の交通ルールや避難訓練など児童の危機意識を高める指導や安全指導を行っている」
→ 交通安全指導については長期休業前に実施し、避難訓練については予告無し訓練や起震車体験などを行うなど、防災・防犯も含めた安全指導に努めた。来年度は煙体験を予定しており、計画的に防災意識を高めていく。保護者のアンケートから、子供の危機対応に不安を感じていることが伺える。実施した避難訓練等をHP等で情報発信していくことはもちろん、体験したことを家の人に話をするよう促したり、家族で防災・防犯に関わることを考える機会を提供したりしていく。

◆ 協議会の提言（次年度にむけて取り組んでいく内容）

○学校運営について（1～7項）

- ・ICT活用スキルを高め、個に応じた指導の充実を図っていく。
- ・家の人の関わりを考慮した取組を実施し危機意識の向上に努める。

Ⅱ. 「学習指導について」（評価項目8～11）

◆ 集計結果の考察

- ・肯定的意見が多いが、昨年度と比べて「あてはまる」割合が全般的に低下している。ただし、児童アンケートでの5項「先生は、わかりやすく教えてくださいか」は、「あてはまる」率が昨年度から若干上がっていた。6項「学級の友達の前で自分の意見や考えを言いやすいか」については、昨年度に比べて「あまりあてはまらない」率が上がり、教職員自己評価の10項学び合える形態において、「あてはまる」率が減少したと合致している。コロナ禍で学び合いがコロナ前に比べて配慮しなければならないことが多いが、昨年度に比べて下回ったことを重く受け止め、協働的な学びへのアプローチをしっかりと確立させ授業改善に努めていくことが必要である。日常の児童の様子から自信があまり持てないものに対して躊躇する様子が伺えることもアンケート結果と合致する部分である。
- ・保護者のアンケートにおいて4項「学校で学習するための基本的習慣を身に付けている」について、「あてはまる」率が微増したものの「ややあてはまる」率が減少し、若干肯定的評価が減少している。
- ・11項の読書については、昨年度に比べ肯定的評価が若干下がり、保護者の認識も若干微減しているが、児童の捉え方は肯定的評価が昨年度よりも高く、認識の違いが出ていた。

◆ 学校関係者評価から

- ・コロナ禍の中で、学習方法の在り方を考えさせられる時代である。学校での先生方の苦労も大変なことであるが、この状況を前向きにとらえICTの活用や学ぶ形態等の取組を積極的に行っている様子がうかがえる。この努力が着実に成果を上げることを期待する。
- ・最近の子供達は、タブレットやスマホ等が普及し、アンケート結果を見ても読書をする機会が少ないと思う。読書は各家庭で行うことであるが、特に低学年のうちに各家庭で行えるよう指導願いたい。
- ・授業は教師、親、子供に様々な不安はありつつも前向きに取り組んでいることが伺える。ただ、人前での発言が少し苦手意識を抱く子供もいるので、日々の会話など少しずつ言葉を発する機会をつくってあげたいと思う。また読書週間は身に付いているので、アウトメディアの取組を、

押しつけではなく、自然に取り組んでいけるよう少しずつ浸透していくのが望ましいと思う。

- ・教員アンケートの項目10が前年よりやや下がったとのことについては、児童評価と結びつけて課題が探られており、適切な分析だと思った。なお、児童同士で学び合える形態や教材の工夫について先生方の自己評価がやや低かったのは、このコロナ禍での制限もあり、先生方がやりたいと考えている授業のイメージと実際がずれていたのかもしれない。しかし、このように評価が下がったことは、逆に先生方がもっとこうしたいという思いの現れであると考え。自由記述でも学びたいとの声があるように、こうした先生方の子供への思いを大切に今後もしていただければと思う。その際、各教員がやりたいと考えている学び合える授業のイメージ、実際に教員が工夫していること（授業形態や教材など）について校内研究などで共有したり、各学年の工夫を蓄積してデータ化するなど、各教員が自由に使えるような形にしたりすることも検討されても良いかもしれない。また、実際は、思いはあってもなかなかうまくいかないという先生方の悩みなどを交流し、それをどう改善していくかを先生方が共同で考えていくという機会もあると良いのではないかとと思う。「児童同士で学び合える形態」を学校全体で実現していく上で、先生方がお互いに学び合える機会を増やしていくことも大切になると思った。
- ・児童アンケートの項目6であるが、授業だけでなく、授業以外の場面での自分の考えや意見の言いやすさの問題もあるかもしれないと思った。授業づくりだけでなく、学級づくりの面からも、子供達が意見を言いやすい関係を築いていくことを今後も進めていただければと思う。

◆ 課題の改善策

8 項「基本的な学習習慣について共通理解し、継続的に指導している。」

* 基本的習慣・・・①学習の準備（用具や心構え）ができる ②学習時に話を聞くことができる

9 項「ねらいを明確にし、一人一人の発達に配慮して児童の良さや特性を引き出し、楽しくてわかる授業を実践している」

10 項「児童同士で学び合える形態や教材等を工夫し、授業改善に取り組んでいる」

→ 学習習慣については、お便り等で学校の様子を定期的にお知らせする中で保護者と連携しその確立をしっかりと図る。

授業については、校内研究で取り組んでいることを中心に、教職員はアクティブ・ラーニングの視点で授業改善を行い、ICT活用スキルを高め、より分かりやすい授業やきめ細かな学習指導に努める。特に、学んだことをしっかりと活用できる概念的な知識の習得を図るために、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」を働かせ深い学びの実現を目指し、また、自らの考えをアウトプットしていく協働的な学びの場を意図的につくっていく。

* アクティブ・ラーニング「主体的・対話的で深い学び」：

（主体的な学び） 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び。

（対話的な学び） 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び。

（深い学び） 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び。

* 「何ができるようになるのか」という観点から、育成すべき資質・能力を整理し、それを育成するために「何を学ぶのか」という必要な指導内容等を検討し、その内容を「どのように学ぶのか」という子供達の具体的な学びの姿を考えながら構成していく必要がある。

11 項「読書の面白さに気づかせながら、読書に取り組めるよう指導・支援している」

→ ボランティアや教務職員による読み聞かせ、読書週間に伴う各種イベント、おすすめの本の紹介を各自で作成し掲示、学級文庫の定期的な本の入れ替え、家読ポップコンクールへの応募等、子供達が本に親しんでもらえるよう取組を行っている。また、今年度から県立図書館と連携することが確認されているので、少しずつ活動を進め、今後も本との出会いを工夫しながら働きかけていく。

◆ 協議会の提言（次年度にむけて取り組んでいく内容）

○ 学習指導について（8～11 項）

- ・新紺屋スタンダードをベースにし、学校での様子を保護者と共有して連携を取りながら学習習慣の確立を図っていく。
- ・教師自身も児童も、意図的に協働的な学びの場を設定し、自己を表現できる機会を増やしていく。
- ・読書への関心が高まるように引き続き全校で取り組んでいく。

Ⅲ. 「生徒指導について」 (評価項目12～14)

◆ 集計結果の考察

- ・全体的に肯定的評価が多く、何れの項目も100%である。12項の挨拶については、児童会の取組の成果もあり、改善傾向にある。言われて挨拶をするのではなく、自ら進んで挨拶できるように今後とも働きかけていく。
- ・14項「児童の悩みや相談を聞き、いじめ・不登校・問題行動等の予防や早期発見及び速やかな対応を行っている」については、肯定的評価は前回同様であり、いじめについては保護者からの評価も同様に肯定的評価であった。児童アンケートの11項「先生にいろいろなことを相談できますか」という問いには、昨年度と比べて否定的評価が微増している。

◆ 学校関係者評価から

- ・全体的にどの項目も高評価になっており、忙しい中でも、きめ細かな指導が行われていることが想像できる。少し気になるのが「あいさつ」であるが改善の様子が伺える。地域・家庭・児童と協力しながら地道な努力をお願いしたい。
- ・挨拶は、特に高学年になるほど重要だと思う。学校では先生達が率先して行っているようであるが、各家庭でも挨拶ができるよう保護者とも協力を願ひ、特に低学年のうちから指導していったらと思う。
- ・毎日の挨拶運動は、親が思っている以上に取り組んでいると思う。また、教師と児童の距離感はいい意味で近いので、過度な馴れ合いは良くないかもしれないが続けて行ってほしい。少人数学級のメリットだと思う。
- ・保護者アンケートの自由記述を見ると、本学が少人数指導の良さを生かしながら、学校全体で丁寧に一人一人の子供達を見守り、関わっていることがよく分かる。先生方が子供達によく話しかけてくれる、見ていてくれる、校長先生が登下校で見守ってくれるなどの保護者の記述は、全学年に渡っているからである。担任だけでなく、他の先生方がこうしていろいろな目で一人一人の子供を見守り、関わるということは、子供達の多様な姿を捉えたり、なかなか声を上げられない子供達の思いに気づいたりする可能性を広げるものだと思う。今後もこうした関わりを大切にしていってほしい。こうした地道な関わりの積み重ねがあれば、児童アンケートの項目11にあるような相談ができないと感じている子供の割合も少しずつ減っていくのではないかと思う。
- ・挨拶については、子供達の性格や関係性の問題もあるので、挨拶をすることを目指すよりも、挨拶をしたくなるような関係を育むことを目指していただけると良いのではないかと思う。

◆ 課題の改善策

- 12項「児童会活動のあいさつ運動と連動し、教師自ら日々あいさつのある生活を送っている」
- 引き続き挨拶することを教職員が率先して行い、気持ちのある挨拶とはどういうことかを考えさせ実感できるようにする。今一度、教職員で共通理解を図り、保護者にも協力をお願いする中で、挨拶する雰囲気づくりに努め、自ら挨拶ができるようにしていく。
- 14項「児童の悩みや相談を聞き、いじめ・不登校・問題行動等の予防や早期発見及び速やかな対応を行っている」
- 児童が相談しやすいと思うことが第一であるので、学校全体として、全教職員が全校児童をみるという意識で、安心して学校生活を送ることができ、不安や悩みが出たときには共感的に話を聞き、一緒に悩んで解決していくよう、話しやすく相談しやすい雰囲気を醸成していく。

◆ 協議会の提言 (次年度にむけて取り組んでいく内容)

○ 生徒指導について (12～14 項)

- ・全職員が全児童に挨拶や声掛けを意識し、児童が話しやすい相談しやすい明るく開かれた雰囲気づくり環境づくりに努める。

IV. 「連携について」 (評価項目15～16)

◆ 集計結果の考察

- ・ 全体的に肯定的評価である。15項「学校は保護者にとって連絡や相談がしやすく、適切に対応している」については、保護者も概ね相談しやすく適切に対応していると評価している。
- ・ 16項でも肯定的な評価が高く、児童保護者においても関連した12項の質問に対して、前年度の結果よりも上昇してはいるが、児童のアンケートにおいては「おたよりを渡したり学校での出来事を家の人に話したりしている」項目について、昨年度に比べて肯定的評価が微減している。

◆ 学校関係者評価から

- ・ 学校行事、たより、HP、安心メールなどにより丁寧に素早く学校の様子を保護者や地域に発信しようという取り組みや姿勢が高評価につながっていると考え。また、地域の人材活用や山梨大学との連携など「地域の学校」としての存在感を感じる。
- ・ 夫婦共働きが多い時代、なかなか子供達と保護者、また学校と保護者がお互いに話す機会が少ないと思う。児童と保護者が、積極的に話ができるよう指導願えればと思う。
- ・ 総じて学校と家庭の関係は良好で、子供を通じて情報交換が取れているのでは。一方で、親が学校に行く機会が少ない点で距離を感じる方がいると思う。現状は、授業参観やPTA関連の活動以外ないので、親が学校に行く敷居が少し低くなると密に連携が取れるかもしれない。
- ・ IIIの生徒指導の評価にも通じるが、保護者との連携はとても良いと思う。
- ・ 課題となっている評価項目(教員項目16, 保護者項目12, 児童項目12)については、家庭の事情などで、児童が保護者にお便りを渡してゆっくり話したりする時間がない家庭もあるかもしれない。そのため、協力の促し方には、そうした家庭があることも踏まえて、配慮が必要であると考え。お便りもそうだが、児童が学校で面白かったことや楽しかったことを交流するきっかけづくりの工夫をされると良いと思う。その意味では、「新紺屋小1日学校美術館 現代アート展」のような面白い企画はとても魅力的だと思った。

◆ 課題の改善策

- 16項「教育活動や児童の様子をお便りやHPを通して、家庭や地域に知らせ理解を得ている」
→ 学校での様子をHPにUPしたことで、保護者からも自身の子供が所属する学年ばかりでなく学校全体の様子が分かって良かったというコメントをいただいた。不定期に連絡する安心メールにHPのURLを貼るなどしてアクセス数を増やすなど、折に触れて紹介するようにしていき周知を図る。児童に対しても家で学校での出来事を話すように伝えると共に、保護者にも子供に声掛けを行うよう働きかける。
- 個々の分掌も多く、ますます職員間で連携することが求められる。学校全体で取り組んでいることが伝わると、保護者や地域のより一層の協力も得やすくなり、「チーム新紺屋小」の学校力向上に寄与するものと考え。また、「with コロナ」の中で地域連携の在り方を、対話を通して確認し、更なる連携を構築していく。

◆ 協議会の提言(次年度にむけて取り組んでいく内容)

○教育活動の状況について(14～20項)

- ・ 一層の情報発信、情報共有に努める。
- ・ 学校運営協議会発足に向けて、趣旨を周知し、学校・家庭・地域の役割を確認し連携のベースをつくる。

V. 「その他」 (本校の教育に関わること全般)

◆ 学校関係者評価から

- ・ コロナで学習環境の急激な変更を求められている中で、ICTの積極的な活用、なかなか体験できないタグチアートコレクションの鑑賞、藤村記念館での地域の文化・歴史の発表など攻めの教育活動の様子が伺える。児童の興味を刺激する多様な視点から楽しく安心して学べる新紺屋小学校は地域の宝である。
- ・ PTA活動や教師への相談などを、Chromebookを活用できればより便利で身近になるのでは。

もちろんネット環境や不慣れな方への対処など課題点もある。

→Chromebookはその用途が子供の学習に限定されているため活用は難しいが、デジタル社会に向けた在り方を考えていく必要はある。

- ・校長先生の挑戦状や校内の掲示から、教師・子供・保護者が学校の様子を共有したり、交わったりする機会を作る工夫がありとても良いと思う。
- ・地域学習アシストで校内や子供達の様子を拝見しているが、子供達が大変のびのびと過ごしていると感じる。3でも書いたが、担任だけでなくいろいろな先生方が一人一人の子供達に関わり、多様な目で子供を見ていることが本校の強みであると思う。子供達の姿から気づいたこと、気になったことなどを先生方が共有し、今後も子供達のために教育を進めていっていただければと思う。

◆ 課題・改善策

- ・コロナ禍により、子供達の精神面でのケアも含め、安全・安心して学校生活を送れるようにしていくことが求められる。感染状況を常に注視し、国や県の動向による市教育委員会の指示のもと、情報を共有する中で、家庭と連携しながら感染対策を講じていく。

◆ まとめ

全体的には、概ね良かったという評価である。「ややあてはまる」と感じている評価者も多いため、質的向上に努めていきたい。

保護者からは、日頃一人一人を大切にしたいきめ細かい指導に対する感謝の意のコメントを寄せていただいた。市役所や県立図書館、警察署や消防署、商店街や自然豊かな八幡神社等、学校の立地条件はとても良いので、その利点を生かした体験活動を仕組み、新紺屋小の特色ある教育活動の推進に引き続き努めていきたい。

課題としては、「令和の日本型学校教育」を推し進めるために、ICTを有効活用するなど「個別最適な学び」と、課題に対してより確からしい納得解を集団として作り出せることに必要な「協働的な学び」の推進を図っていくことである。そのためには、ICTの活用スキルを向上させていくことが求められる。また、個々の実態把握とそれに伴う対応について、特に特別な配慮や支援を必要とする子供への対応は教師に共通的に求められる資質の内容であり、研修・研鑽を積んでいかなければならない。これらの点においては、ICTを校内研究テーマとして取り組んだり、特別支援教育については、学校運営協議会設置推進委員会で山梨大学教授の高橋英児先生による学習会を1学期に行ったりするなど、先見の明を持って研修、研究を進めた。今後も、教師力向上を図りつつ、教育的効果をあげるための方策をしっかりと立てて教育活動を行っていくことが求められる。また、来年度は、小中体連研究推進校として、2年目のまとめの年にも当たり、本校での課題の一つである体力向上をどのように図っていくか、校内研究の柱として取り組み、秋には公開研究会を行う予定である。

上記と並行して多忙化改善を図り、引き続き働き方改革を推進していくことも大きな課題として挙げられる。メリハリのある仕事の進め方を意識すること、アイデアを持ち寄り工夫してやりがいを感じる中で教員間でのコミュニケーションを一層図りつつ改善に努めていきたい。

来年度から本校も、文部科学省が目指しているコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）になる。学校と保護者や地域の皆さんがともに知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させることで、一緒に協働しながら子供達の豊かな成長を支え、「地域とともにある学校づくり」を進められるように、小さく始めつつも、大きく育てるイメージで組織構築を図っていきたい。学校でできること、地域や保護者でできることを整理し、より良い学校運営の在り方について、チーム学校として考えていきたい。